シーワールドのアニマル達

●ムコ入りして来たワモンアザラシ

昭和53年以来、独身生活をおくり、「花ムコ募集中」だったワモンアザラシの「ミミ」に待望？のおムコさんが昭和57年11月やってきました。それが今回ご紹介する「ポッキー」です。

ワモンアザラシは、ひれあし類の中では最も北に分布し、北極周囲の氷上に生息する小型のアザラシで、北海道以外ではあまり飼育をされていないめずらしいアザラシです。たいへん神経質で、他種のアザラシ達となじみにくく、飼育下ではまだ繁殖に成功していない種類です。

この「ポッキー」は昭和56年に北海道の釧路川河口に迷い込んだところを釧路動物園によって保護されたもので、現在3才、おムコさんとはいうものの、まだ子供のワモンアザラシです。
当館に来たときは、豆タンクという表現がぴったりの体長90㎝、体重30㎏の健康優良児。大きなドングリマナコをキョロキョロさせて、いくぶんおちつきのない様子でしたが、現在では、新しい環境にもすっかりなれ、運動量も増したのか、いくらかスマートになり、なかなかの美少年になってきました。

さて、かんじんの「結婚」の方ですが、花嫁の「ミミ」は、体重では「ポッキー」の2倍、年令の方も結婚適令期をちょっと過ぎたところのため若すぎるおムコさんとはおにあいのカップルとはいかず、結婚までにはもう少し交際期間が必要で、目下お見合中といったところです。
でも数年後には「ミミ」が姉さん女房ぶりを発揮して、かわいらしいまっしろな二世が誕生することを楽しみにしています。（荒井）

▲ワモンアザラシ *Phoca hispida*

●天然記念物「イタセンパラ」

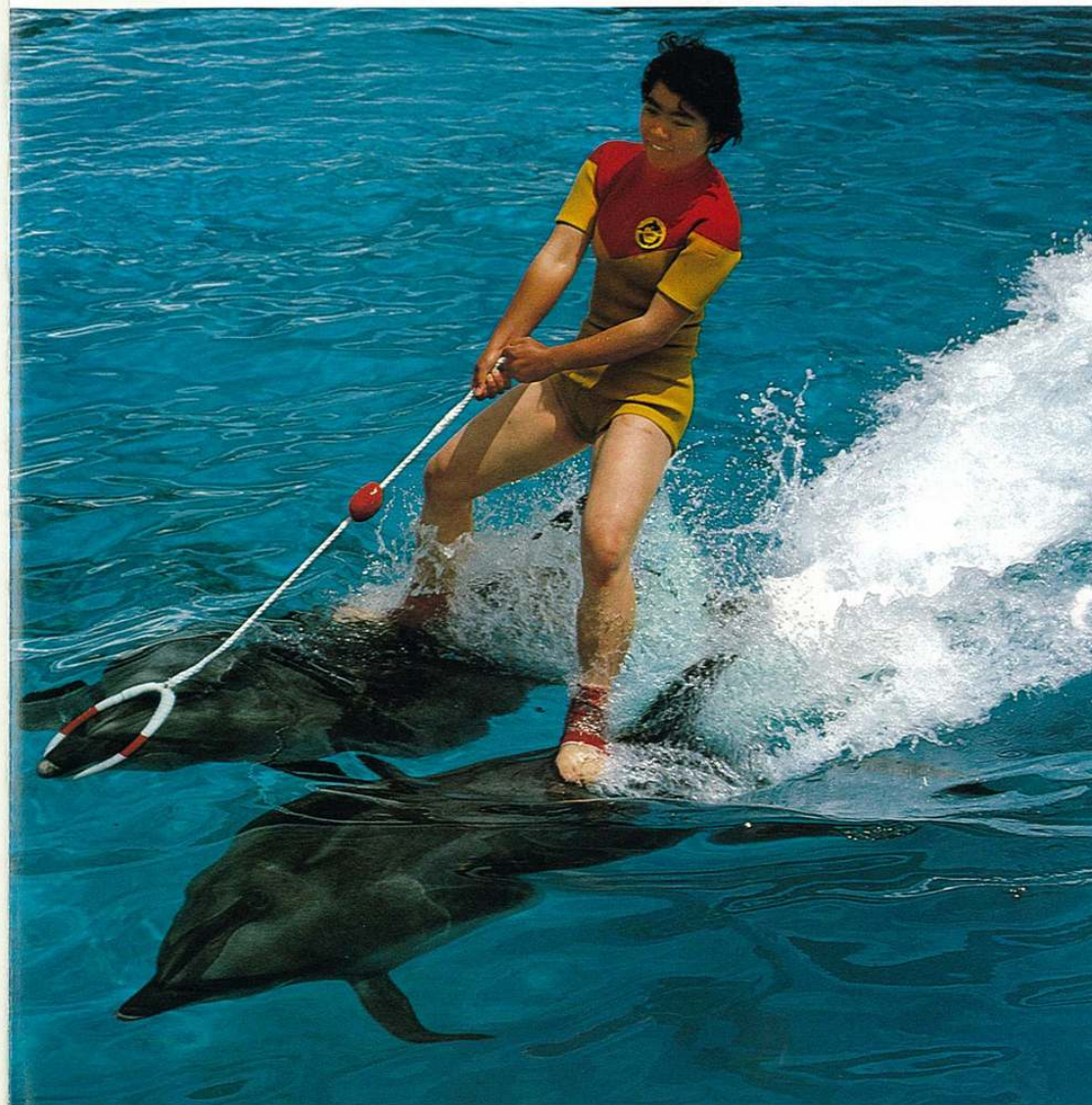
イタセンパラは、タナゴの仲間でコイ科に属する魚です。京都府、岐阜県、富山県の限られた池や川だけに生息していますが、環境の悪化や他の魚との生態系のバランスがくずれたため、最近では急に数が減ってきました。そのため関東地方に生息する同じタナゴの仲間で絶滅寸前であるミヤコタナゴとともに、昭和49年に国の天然記念物に指定されました。

イタセンパラの特徴は、体色が銀白色で、体高が他のタナゴより目立って高く、背鰭としり鰭の鰭条数も、日本のタナゴの中では最も多く、背鰭は14〜16条、しり鰭は13〜16条もあります。生息場所は、池、沼、流れのゆるやかな川などの水草の多く茂ったところを好み、水中の附着藻類を主な餌としています。

当館では、今年の4月に文化庁の許可をいただいて、イタセンパラの展示をすることになりました。魚達は滋賀県にある琵琶湖文化館で繁殖した、体長3〜4㎝の稚魚を特別にわけてもらい、5月25日から館内に設けた特別水槽で展示をはじめました。初めの内は、水槽になれていないためか、水草などのうしろにかくれていることが多く、人目にふれることをさけていましたが、餌付けも進むにつれて次第になれ、人目も気にせず水槽内を元気に泳ぐ姿を見られるようになりました。

小さな目立たない魚ですので見過ごしてしまうおそれもありますが、来館のおりには、是非ひと目この天然記念物のイタセンパラをご覧下さい。

（高橋幸）

▲イタセンパラ *Acheilognathus longipinnis*

世界の自然をわたし達の手で護りましょう！

●会員になりたい方は入口の総合案内所に御相談ください。
●会員にはパンダのバッヂと月刊誌の会報が送附されます。
※会費は年額3,000円です。

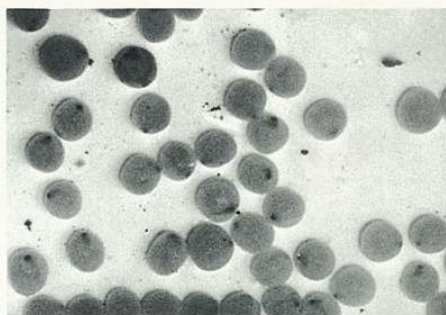
財団法人 世界野生生物基金日本委員会
〒101東京都千代田区外神田4丁目8-2ヤマキビル5F ☎(03)255-3770

さかまた No.21 （禁無断転載）
編集・発行 鴨川シーワールド
〒296 千葉県鴨川市東町1464−18
☎ 04709（2）2121
発行日 昭和58年8月

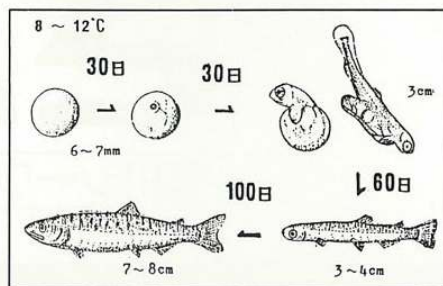
さかまた

鴨川シーワールド NO.21

サケの卵の展示

サケは漢字で「鮭」と書き、関東ではシャケと発音しますが、サケが正しい呼び方です。このサケは千葉県でも時々夷隅川に姿を見せ、話題をよぶことがありますが、太平洋側では、関東地方以北に生息しています。千葉県では、サケの卵は1月ごろに川の上流でふ化し、成長しながら川を下り、4月ごろに海に出ます。海ではアミや小魚を食べて次第に成長し、3年～5年ほどたつと成熟して、生まれ故郷の川へもどってきます。そして、11月ごろ川をのぼり産卵し、その生涯を終えます。

▲サケの発眼卵。

サケの卵は、大きさが直径6～7㎜もある大きなもので、お正月にはイクラやスジコとして食卓にのぼることも多いので広く知られています。サケ1尾の産卵数は、3,000～5,000粒ですが魚の産卵数としては少ない方です。サケの仔魚が卵からふ化するシーンは、写真などで見ることができますが、実際にこれを見る機会はまれなことです。そこで、このサケの卵がふ化する様子を実際に目で見てもらうため展示することを試みてみました。

▲ふ化したばかりの仔魚。

▲仔魚の誕生と成長。

サケの卵は、12月24日に茨城県の大洗水族館よりわけていただきました。輸送には自動車を使用しましたが、卵はぬれたガーゼに包み、断熱ケースに収容し、係員がひざの上に置いて大切に運びました。サケの卵は、8℃の水温では、産卵後30日前後で卵の中に黒い眼が見えるようになり（発眼卵）、さらに30日後にふ化します。つまり、8℃の水温では、60日程でふ化することになります(8℃×60日：480℃・有効積算温度)。この原理をうまく応用して今年のお正月には、4℃（ふ化まで120日）、8℃、16℃（ふ化まで30日）の水温で卵を管理し、発眼卵、ふ化直前の卵、ふ化したばかりでおなかに栄養となる大きな袋をつけた仔魚の三段階の展示を行なってみました。

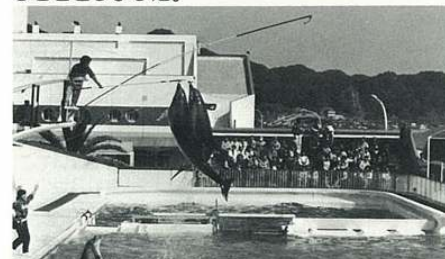
▲サケの卵、仔魚の展示。

展示水槽の前では、卵から仔魚が顔を出したりふ化をしたりするたびに、生きているサケの卵に対する驚きと感動の歓声があがりました。

お正月に生まれたサケの仔魚は、4月まで淡水で飼育し、その後海水に移され、今では10㎝にも成長し元気に水槽の中を泳いでいます。

（津崎順）

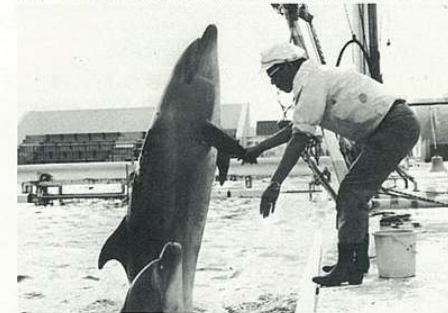
イルカスターへの道

イルカ・シャチショーが終ったあと、係員がお客様の質問にお答えしていますが、その質問の大多数は、「どうやって調教したのか」「どのくらいの期間でこのようなショーができるのか」といったものばかりです。そこで今回は、野生のイルカが生捕られてから、水族館のスターとなるまでの経過をバンドウイルカに登場してもらい、イルカ“スターへの道”と題して簡単にご紹介してみることとしました。

▲呼吸もぴったり／2頭のイルカのジャンプ―イルカスター大活躍―

イルカの生捕り方法には種々な方法がありますが、当館で飼育されているバンドウイルカは、多数の漁船によって入江や港に追込まれる「追込み漁」と呼ばれる方法により、伊豆半島や紀伊半島で生捕られたものです。生捕られたイルカ達は、入江や港の中に網で仕切って蓄養され、餌も自然海で食べていたものとは違うもので餌付けをされて、水族館に運ばれる日を待ちます。

水族館へは、海から担架でとり上げられ、体がかわかないようにシャワーで水をかけられ、重い体重により内臓をおさえられたりしないように、厚いマットレスの上に乗せられ、注意深く大切にトラックで運ばれます。そして、種々な健康診断や身体検査を受けたあと、飼育プールに収容されます。

▲担架に乗せられ水族館へ

プールに放されたイルカ達は、まずその環境や餌に慣れることから出発します。水族館では主にサバを餌として与えられ、1匹のままの魚から、切身も食べられるようにならされます。やがて係員の手元から餌を取れるようになる頃には、係員の吹く呼笛が餌をもらえる合図ということをおぼえるための、餌と音による一般に「条件づけ」と呼ばれる訓練の第1歩がはじまります。このようにして、「報賞（餌）と動作」の結び付きを強めながら訓練が進められて行きます。訓練する種目は、イルカ達が持っている行動や性質をトレイナ

▲調教は簡単な種目から

ーが引き出しながら進めて行きます。初めに餌の食べ方から、一定の場所に集まることやイルカ同志がケンカをしないように「しつけ」の訓練がおこなわれ、「しつけ」が終るといよいよ本格的な訓練のはじまりです。まず簡単な種目を選び、訓練する目的を良く理解させるための「エデュケイション（意図の理解訓練）」がなされ、続いて「トレーニング（熟成訓練）」へと進められて訓練種目が完成して行きます。こうして、3ヶ月から半年ほどの訓練で1頭のイルカが、25種目以上の芸を習得し、スターとして育って行くのです。

（清水）

表紙説明

マリンスポーツの花形の一つ水上スキーは、高速のモーターボートやヘリコプターに曳かれて水面を滑るものですが、シーワールドの水上スキーは、2頭のバンドウイルカの背に乗って水上を滑るイルカと人間の呼吸がピッタリと合ったものです。（清水）

トピックス

ただいま人気上昇中！脇役スター大活躍（アザラシとペンギン）

アシカショーの前座をつとめているアザラシとペンギンに、最近来館者の人気が集まっています。このアザラシやペンギン達は、いずれも当館生まれの2世・3世達で、人なつっこいものばかりです。アザラシは、ゴマフアザラシ２頭とゴマフアザラシとゼニガタアザラシの間で生まれた雑種２頭の計４頭で、５種目以上の芸をこなしています。なかでも、４頭が台に着いて上半身をそり、短い前肢で胴をたたく姿はタヌキの腹つづみを連想させられます。ペンギンは、6羽のチームで総てフンボルトペンギンです。ペンギン独特のユーモラスなヨチヨチ歩きをしながら集団で行進する姿には、つい口元もほころびます。ペンギンチームの圧巻は、前号（さかまたNo.20）で紹介された当館生まれの3世のペンギンのローラースケートです。小さな特製のローラースケートをはいて、すべるというよりもころばないようにいっしょうけんめい歩く姿は、もう大爆笑の連続です。

普段はなにげなく見過ごしてしまうような動物達の行動の中から、独特な行動を引き出し調教して、動物ショーとして来館者にご覧いただいていますが、動物達の持っている秘められたすばらしい能力の一端を、動物ショーを通じて理解いただければ幸いです。（平塚）

▲ローラースケートをはいてごきげんな当館生まれ3世のフンボルトペンギン（ブッチーちゃん）。

▲全員そろって腹つづみ？ 短い前肢で体をたたいて「ペチャペチャ」と大まじめなアザラシ達。

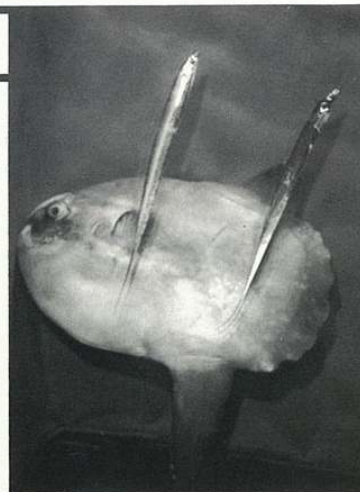
◀当館生まれの2世のペンギン達は、障害物もなんのその、ふみ越えのり越え大行進。しかし、中にはぬけ道をおぼえ、チョット失礼というチャッカリ者もいます。

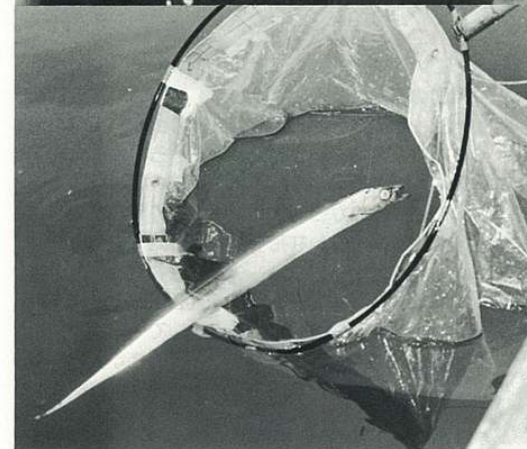
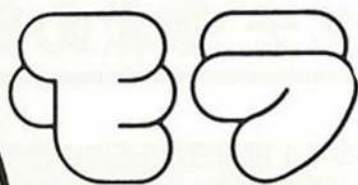
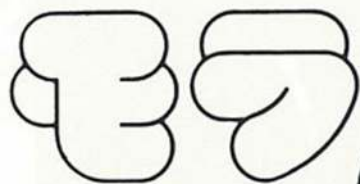
タチウオの飼育に挑戦中

今年１月24日からマンボウを展示している「マスコットコーナー」に、新しくタチウオが仲間入りしました。

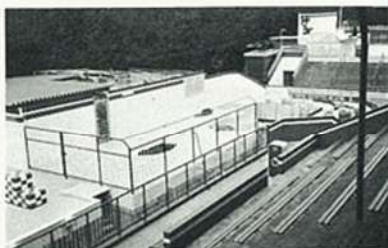
このタチウオは、全身銀白色のメタリックに輝く刀のような形をした魚で、食卓ではおなじみの魚ですが、水族館での飼育は大変むずかしい魚の一つなのです。

マンボウの長期飼育記録をつくりあげた技術を応用して、このタチウオの飼育に挑戦する試みがスタートしたのは、ちょうど１年ほど前の事でした。鴨川の定置網で春から秋にかけて良くタチウオが捕れているので、何とか飼おうと考えていましたが、皮ふに鱗がなく、傷つきやすいためすぐに死んでしまい、はじめはなかなかうまく飼育することができませんでした。そこで今回は、特別製の採集用具を考案し、タチウオを傷つけずに取扱うようにしたためようやく順調に飼育ができるようになり、５月末には飼育日数も160日目をむかえ、現在も元気に水槽の中を泳ぎまわっています。

展示中のタチウオは、キラキラ体を輝かせ、半透明な背鰭を波打たせ、時には独特な立ち泳ぎも集団でおこない、水中での「剣の舞」を見せてくれます。（小坂）

▲頭を上にして泳ぐタチウオ。

▲マスコットコーナーに展示されたタチウオ。

◀改良に改良をかさねた採集道具。１匹捕るごとに新しいものととりかえる。

●アシカ展示プールの改装

今年3月に、アシカショープールのとなりにあったプールを改装し、1つの大きなアシカ展示プールをつくりました。このプールには、以前、オーストラリアアシカやカリフォルニアアシカの親仔、ワモンアザラシ、フンボルトペンギンなどの動物達が、入れ替り展示されていましたが、新しく改装されてからは、オーストラリアアシカ3頭が、伸び伸びと生活しています。このアシカ展示プールの改装の目的は、今後、成長すると3トンにもなるゾウアザラシなどのような大型のひれあし類も飼育できるようにするためのもので、これからもめずらしい海獣たちを皆様に知っていただくための準備の1つなのです。早く海の仲間が増えるように、皆様も応援して下さい。

（前田）

●春のタッチング水槽大繁盛

毎年夏休みに開設されるタッチング水槽は、子供達が磯の生物を自由にさわり、生物を観察できることから人気がありますが、今回3月25日から5月5日までおこなわれた春の催し物にも、小川や池にすむフナ、モツゴ、メダカなどの淡水の生物を集めてタッチング水槽を開設してみました。魚の方に夢中になりすぎて、水槽の中へ落ちてしまったチビッ子もいましたが、オタマジャクシやアメリカザリガニ、クサガメなどはつかまりやすく、チビッ子達には大変な人気となっていました。また、お父さんやお母さんからは“自然に親しむ機会の少ない現代っ子にとって大変勉強になります!!”“子供の頃小川で遊んだことを思い出しました!!”などという声も多く聞かれ、大好評の春のタッチング水槽となりました。

（森田）

●富山町岩井で捕れたカマイルカ

春休みでにぎわう4月3日と子供の日の5月5日に、千葉県富山町岩井の定置網にイルカが迷い込んだとの連絡を受けたので、さっそく係員を派遣し種類を確認したところ、いずれもカマイルカでした。4月3日の1頭と5月5日の3頭のこれらのカマイルカはトラックに乗せられ、無事シーワールドのイルカプールに収容されました。網によるスレ傷があるものや、なかなか餌付かないイルカもいましたが、今では先輩格のバンドウイルカ達と仲良くなり、係員がプールサイドに近寄ると顔を水上に出して餌をねだるまでになりました。白と黒のツートンカラーの小さなカマイルカが4頭で群をなして元気に泳ぐ姿は、目ざといチビッ子達の間で話題になっています。

（佐伯）

●パノリウムに水草も展示中

淡水系のパノリウム水そうに水草を展示し、より自然のふんい気を出す試みが続けられています。けい流の沢には「ワサビ」、湖には「スイレン」、水田には「クワイ」、小川には「フサモ」などがミニチュアとともにパノリウムの風景の演出に一役かっています。太陽の光が当らない水そうでの野生植物の栽培は大変むずかしく、花が咲くまで育ちません。そこで、人工照明の光の種類や水草の植え方などをいろいろ工夫したところ、ようやく最近では、15種類もの水草を展示できるようになりました。これからは、パノリウムの魚だけでなく、水草やそのかれんな花々も一緒に見ていただいて、失なわれつつある身近な自然の風物を観察してもらおうと考えています。

（桐畑）